

# 神奈川県レッドデータブック 2回目の改訂に向けて

加藤 ゆき(学芸員)

## はじめに

40億年という長い歴史の中で、地球上の生物はさまざまな環境に適応して進化し、多様な生物が誕生しました。これらの生物には一つひとつに特徴があり、お互いに関わり合いを持ちながら生きています。

しかし近年、人間活動による影響を主な原因として、地球上の多くの種が絶滅の危機に瀕しています。このような危機的状況にある生物種を保全するためには、現状と衰亡の原因を的確に把握し対策をすすめていくことが重要です。その基礎資料として活躍するのがレッドリストでありレッドデータブックです。

## レッドリストとレッドデータブック

この二つは混同されがちですが、レッドリストとは絶滅のおそれのある生物(レッドデータ生物)の目録のことで、レッドデータブックはこれらレッドデータ生物の現状を広く普及啓発することを目的として作られる資料集のことで、

レッドデータブックには、生物の一般的特徴(標準和名や形態、生態、分布など)のほか、絶滅のおそれの程度(レッドデータ度)、現在の生息状況、存続を脅かす要因、保護対策の現状などが解説されています。多くの場合、まずはレッドリストが公表され、その後、レッドデータブックが発行されます。その内容は専門的なため、一般市民を対象とした普及版レッドデータブックが作製されたり、「デジタル図鑑」がWeb上で公開されたりすることもあります。

## レッドデータブックの歴史

世界で最初のレッドデータブックは、1966年にIUCN(国際自然保護連合)が出版したレッドデータブック第1巻「哺乳類」、第2巻「鳥類」です。続いて1977年までに第3巻「爬虫類と両生類」、第4巻「淡水魚類」、第5巻「種子植物」が出版されました。これらの本は差し替えがしやすいように全てルーズリーフ形式となっており、生物種ごとの情報がデータシートとして整理され、赤表紙をつけて束ねられました。しかし、このシートが広く公刊されることはなかったようです。ちなみに、この表紙の赤色から「レッド」データブックという名前がつけられました。近年は、IUCNのような国際版だけではなく、国別、地域別といったように、いろいろな地域区分でレッドリストが公表され、レッドデータブックも発行されています。

日本では、1989年に日本自然保護協会が出版した維管束植物のレッドデータブックが最初で、次いで1991年に脊椎動物と無脊椎動物のレッドデータブック(ともに環境庁編)が発行されました。続いて、地方自治体がそれぞれの地域性を配慮しながらレッドデータブックを発表するようになりました。1995年に神奈川県、三重県、兵庫県が初めて発行してから、2005年までには全国すべての都道府県でレッドデータブック(あるいはリスト)の公表が完了しており、名古屋市や松山市などのように、市町村ごとにレッドデータブックを出版しているところもあります。

## 更新の必要性和頻度

生物のおかれている状況は刻々と変化するため、レッドリストの更新の頻度は高く、たとえばIUCNによるレッドリストは1~2年おきに見直され、Web公開されているレッドデータブックはその情報を元に随時更新されています。この最新版(Version 2016.2)によると、世界に生息が知られている約173万種の動植物のうち、約24,000種が絶滅の危機に瀕しているとされています。

国内の状況はどうなのでしょう。2017年に環境省が公表したレッドリストには、約3600種の陸域・陸水域の生物及び56種の海洋生物が絶滅のおそれのある種として選定されています(表1)。その衰亡原因は様々ですが、生息場所の開発や乱獲といった直接的な影響のほか、地球温暖化による環境の変化や外来種による生態系のかく乱などが主な要因としてあげられています。

## 神奈川県におけるレッドデータブック

このような生物の危機的状況は神奈川県でも同様で、かつては普通に見かけたキキョウ(図1)やオオミズスマシは絶滅寸前の危機にあり、季節の風物詩である春先のヒバリ(図2)のさえざりや初夏のアオバヅクの鳴き声なども耳にする機会が少なくなりました。

当館では、こうした生物の現状を把握するため、全国に先駆けて博物館が主体となり、多くの研究者や関連機関、ボランティアの方々の協力を得て調査を行い、レッドデータ生物の選定および



図1. 横浜市緑区で1983年に撮影されたキキョウ。(勝山輝男撮影)



図2. 草地に生息するヒバリ。(重永明生撮影)



図3. 南足柄市の人家近くにあるサギ山。ここではダイサギとアオサギが繁殖している。

レッドデータ度の評価を行いました。この結果を、1995年に「神奈川県レッドデータ生物調査報告書(レッドデータブック)」として発行し、2006年には改訂版を出しました。

**生物を取り巻く危機的状況**

改訂からさらに11年が経過し、県内の生物を取り巻く状況はさらに悪化しています。たとえば、2006年版で重要な地域個体群として選定した「サギ類の集団営巣地」は近年、減少の傾向にあります。サギ山と呼ばれるサギ類の集団営巣地は、ヒナにえさとして魚を与えるため、河川に比較的近い竹やぶや雑木林、社寺林などにつくられます(図3)。人家と接した林で繁殖をしている場所では、ヒナのフンや鳴き声が悪臭や騒音の原因となり、花火や音声などにより追い払われることもしばしばで、繁殖をするつがい数が減少した場所もあります。樹木を伐採したことにより営巣地そのものが消滅した事例も出てきました。

外来生物の在来種への影響も懸念されます。実際に、特定外来生物アライグマによるトウキョウサンショウウオ(図4)やヤマアカガエルの捕食、特定外来生物クリハラリス(タイワンリス)によるメジロの卵の捕食、営巣場所をめぐる外来種ワカケホンセイインコとムクドリ争い、外来種ウシガエルによるゲンゴロウ類の捕食のほか、外来種アメリカザリガニが導入された湖沼で希少な水生昆虫の地域絶滅が確認されるなど、県内外から外来生物の影響を示す事例が数多く報告されています。

2006年版で生息情報の少なかった両生類や爬虫類の動向も気になります。



図4. 県内では局所的に生息確認されているトウキョウサンショウウオ。(瀬能 宏撮影)

表1. 2017年に公表された環境省レッドリストの分類群ごとの掲載種数。絶滅のおそれが高い順に絶滅危惧IA類、絶滅危惧IB類、絶滅危惧II類と評価されている。詳しい評価基準については、環境省のWebサイト <http://www.env.go.jp/nature/kisho/hozen/redlist/index.html> を参考。

分類群	評価対象種数	絶滅	野生絶滅	絶滅危惧種			絶滅の恐れのある地域個体群
				絶滅危惧 I 類	絶滅危惧 II 類	絶滅危惧 I B 類	
哺乳類	160	7	0	12	12	9	23
鳥類	約700	13	1	23	31	43	2
爬虫類	100	0	0	4	9	24	5
両生類	76	0	0	3	12	13	0
汽水・淡水魚類	約400	3	1	71	54	44	15
昆虫類	約32,000	4	0	68	105	185	2
貝類	約3,200	19	0	264		323	13
その他無脊椎動物	約5,300	0	1	21		42	0
維管束植物	約7,000	28	11	522	519	741	0
蕨類	約1,800	0	0	138		103	0
藻類	約3,000	4	1	95		21	0
地衣類	約1,600	4	0	41		20	0
菌類	約3,000	26	1	39		23	0
魚類	約3,900	0	0	8	6	2	2
サンゴ類	約690	1	0	0	1	5	0
甲殻類	約3,000	0	0	8	11	11	2
軟体動物(頭足類)	約230	0	0	0	0	0	0
その他無脊椎動物	約2,300	0	0	1	2	1	1

開発に伴う低湿地の消失、農地整備に伴う小川などのU字溝化、水田の乾田化などによりサンショウウオ類やカエル類(図5)の多くが絶滅の危機に瀕している地域もあります。また、ヘビ類のなかには夜行性で人目につきにくかったり、いわれなく嫌われたり恐れられたりするせいか、ほとんど情報が寄せられないものもあります。このような危機的な状況を把握し、レッドデータ生物を保護するためにも、レッドリストの更新とレッドデータブックの改訂が必要なのです。

**県版レッドデータブックの改訂**

2017年から神奈川県自然環境保全課が事業主体となり、当館も協力す



図5. 生息環境の悪化により県内で減少傾向にあるトウキョウダルマガエル。

る形で2度目の改訂作業を進めることになりました。作業は生物分類群ごとに順次進めていく計画です。対象とする分類群は、2006年版で対象とした植物(維管束植物、菌類、コケ植物)、脊椎動物(哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類、汽水・淡水魚類)、無脊椎動物(昆虫類、クモ類)に加え、新たに海水魚類、海水無脊椎動物も加えた12分類群で評価を行うこととしました。

地方の自然史博物館の使命のひとつとして、当館では県内外の生物に関する生息情報や標本の収集を続け、それらをもとにした研究をすすめてきました。レッドデータブックの改訂に際し、レッドデータ生物の情報をどれだけ収集しているかが重要となります。今回の改訂ではその成果を十分に活かせるでしょう。

そして改訂作業が始まった今年度、企画展「レッドデータの生物」で、改訂に向けてどのような調査を行い、レッドデータブックとしてまとめ、生物を守っていくのか、写真や標本を使って紹介します。レッドデータ生物の現状を知ることでも私たちに何が出来るのか、博物館と一緒に考えてみませんか。2017年12月16日(土曜)から2018年2月25日(日曜)まで開催しています。